

# 平城京における平安時代の焼物

巽 淳一郎

## I. 平安時代の焼き物の種類と構成

平安時代前期～中期(9-11C)の焼き物には、土師器・黒色土器A・B・須恵器・灰釉陶器・白色土器・鉛釉陶器・中国製青白磁がある。これらは、それぞれの焼き物の特性を生かし、器種の分業生産を行っている。

奈良時代における供膳形態の組み合わせは、土師器7割・須恵器3割の割合であるのに対し、平安時代に入ると表2に示す如く、供膳形態に黒色土器、奈良時代には仏花器等にしか見られなかった灰釉陶器・緑釉陶器が加わる。黒色土器は土師器に次ぐ位置にのぼり、須恵器は供膳形態が少なくなる一方、貯蔵形態が増加する。

平安時代を特色づける供膳形態の器種は高台付の椀・皿であり、まず緑釉陶器に現われ、その後、灰釉陶器・黒色土器・土師器にも見られるようになる。9-10C代では、新しい供膳形態と奈良時代的な供膳形態が融合しているが、次第に古い形態が失われ、高台付椀・皿を中心とした供膳具に統一される。11C代に入るとこの傾向はさらに進行し、古代的な器種が消滅し、器種も椀・皿・鉢に限定されるようになり、古代的な焼き物である緑釉・灰釉陶器も姿を消し、須恵系土器・瓦器・山茶椀が出現し、中世的な展開を遂げる。

## II. 焼き物の変遷とその消長

### 1. 土師器

成形手法の変化 木葉成形→左手成形  
調整手法の変化 a・b・c→c→e、磨き手法の形骸化と消滅  
器種 供膳形態の小形化・貯蔵形態の減少・椀・皿・土釜の出現・供膳形態における規格性の喪失

### 2. 須恵器

成形手法の変化 ロクロ水挽成形登場  
器種 供膳形態の減少と貯蔵形態の増加。糸切椀・鉢の出現(SD 650 B)  
産地 陶邑→亀岡市篠・播磨。

### 3. 黒色土器A

出現時期 平城Ⅲにあり、供膳・貯蔵・煮沸具がそろうのは平城Ⅶ。  
調整手法 一貫してC手法・磨き手法の伝統を保持。暗文の消失の方向をたどる。  
器種の変化 奈良時代的な器種の消失の方向性。椀・皿の増加。

### 4. 黒色土器B

出現時期 壺(平城Ⅶ)・皿(SD 650 A)・椀(6 BYS 西僧房)  
器種 それだけでは日常什器セットを構成しえない。硯・仏花器・香炉・ミニチュア製品を生産。

### 5. 鉛釉陶器

系譜 奈良三彩→軟陶緑単彩陶→(平城Ⅱ) (平城Ⅳ・Ⅴ)

軟陶→無彩化  
硬陶単彩  
(平城Ⅶ)

器種 奈良時代的な器形の喪失と高台付椀・皿の登場。(平城Ⅶ)

### 6. 灰釉陶器

出現時期 瓶類・仏花器(平城Ⅳ～Ⅴ) 椀・皿の登場(平城Ⅶ)

技法の変化 重ね焼きの出現(S D650 B)、体部不調整の碗の出現(6BYS西僧房)

器種 輪花碗・小碗の出現(6BYS西僧房)

### 7. 白色土器 (仮称)

技法 ロクロ成形・酸化焰焼成。

出現時期 6BYS西僧房～SE48(10C後半～末葉)

器種 碗・皿に限定

### 8. 瓦 器

出現時期 平安京左京四条一坊SE08の掘形出土瓦器碗と同井戸内出土の寛治5年5月13日の墨書紀年銘を持つ須恵器鉢が傍証となる。大和では、これに先立つ形式は少なくとも二型式あり、瓦器の出現時期は11C中頃。

技法・調整の変化 大量生産をめざした内型成形。水簸粘土の使用。

磨きの簡略化の方向、底部内面のミガキは暗文風に変化。

器種・形態の変化 大碗・小碗・皿・高台付皿。小型の傾向。高台の矮少化。

### 9. 山茶碗

出現時期 前述の平安京SE08掘形内出土の山茶碗から11C代には出現。

### 10. 須恵系土器

出現時期 6BYS西僧房の時期を境に須恵系土器に転換。

器種 糸切底碗・鉢・壺・甕。

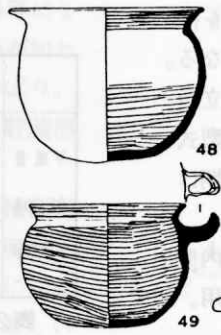
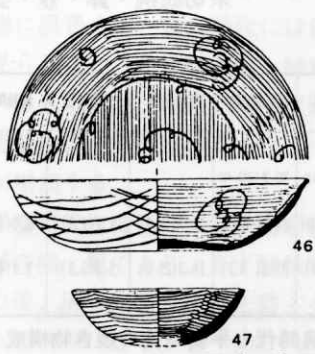
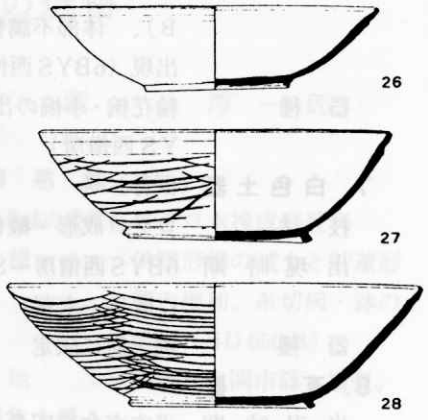
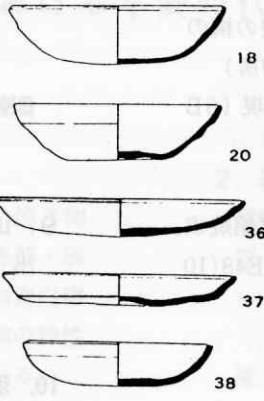
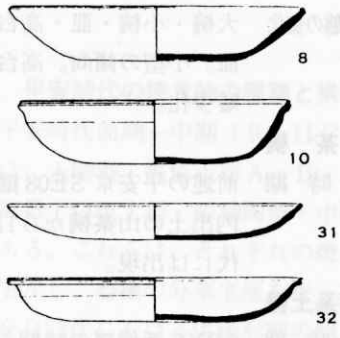
	土師器	須恵器	黒色土器	灰釉陶器	緑釉陶器
平城Ⅲ	69.8(74.0)	30.2(30.0)			
SD650A	58.5(81.0)	24.8(4.6)	12.7(9.1)	1.7(1.5)	2.0(3.8)
SD650B	46.8(60.7)	27.2(3.7)	18.3(25.6)	5.3(5.8)	2.2(4.1)

表2 奈良時代と平安時代の焼き物構成(%)

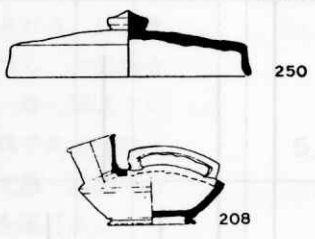
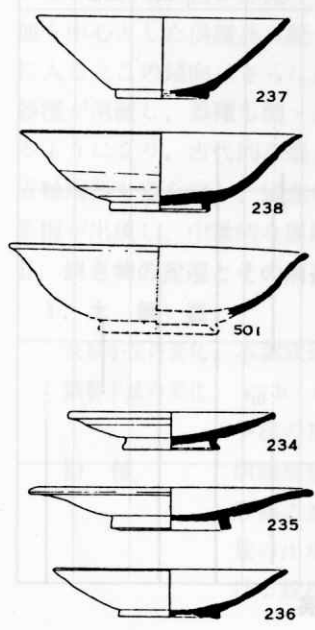
		土師器			須恵器		黒色土器		二・緑釉 三彩	釉 硬・軟	灰釉	中国陶磁		白色土器	瓦器
		食	貯	煮	食	貯	A	B				青	白		
8 C	平城Ⅰ														
	Ⅱ														
	Ⅲ														
	Ⅳ														
	Ⅴ														
9 C	長岡														
	Ⅶ														
10 C	650A														
	650B														
11 C	6BYS西僧房														
	6BYS SE48														
12 C	馬寮Ⅲ											(山)			
	馬寮Ⅳ														

表1 平城京の焼き物の消長

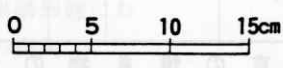
平城 VII 土師器



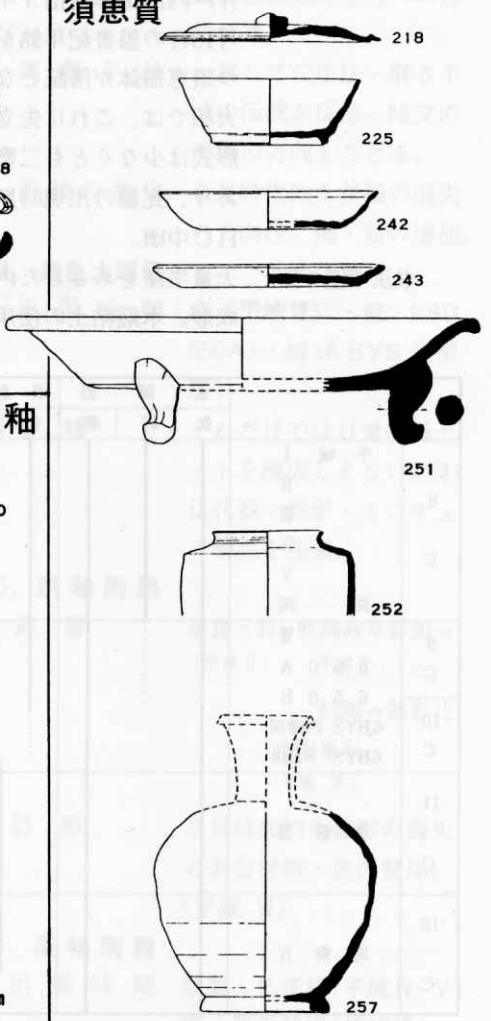
黒色土器 A

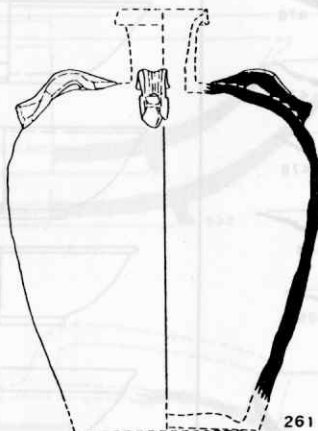
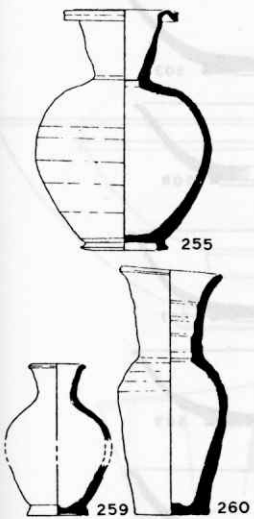
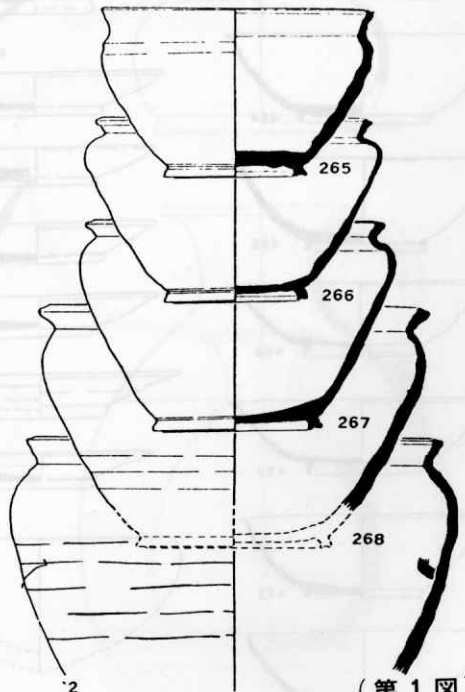
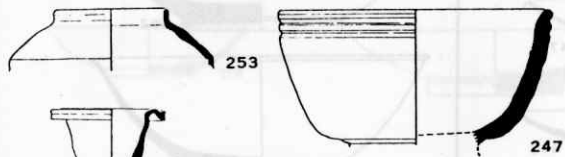
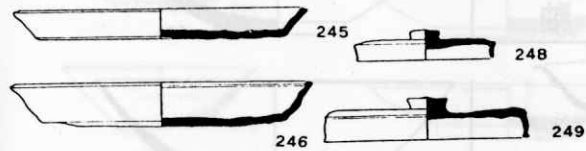
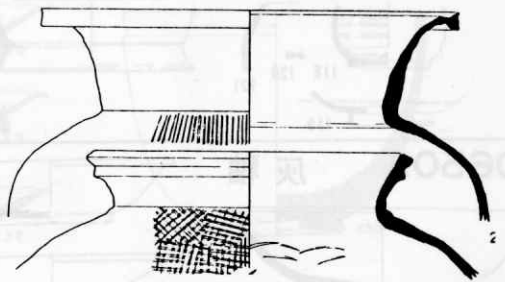
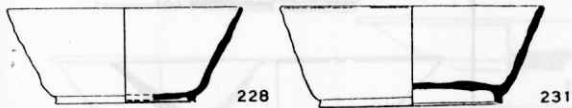
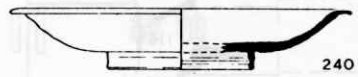
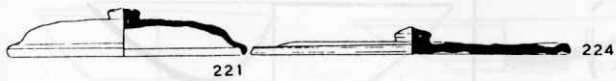
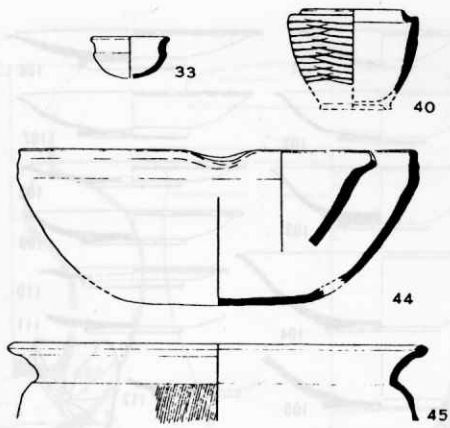
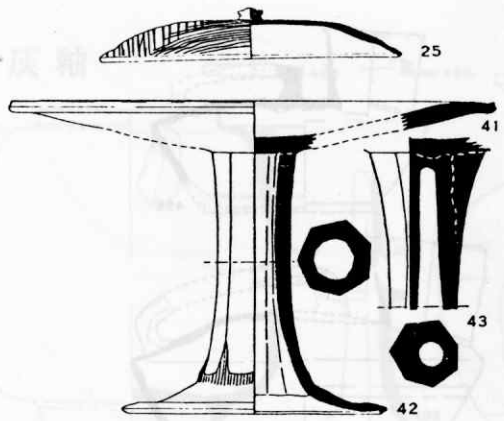


灰釉



須恵質

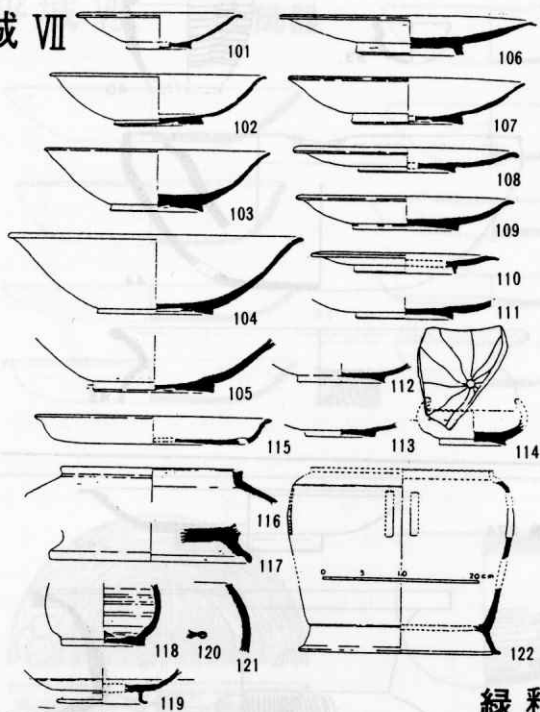




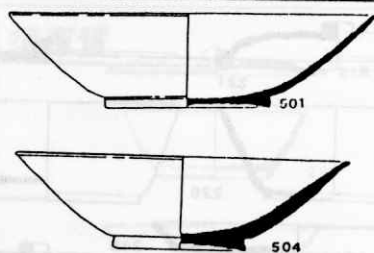
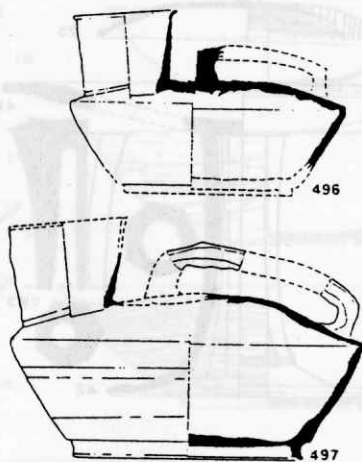
須惠器

(第1圖)

平城 VII

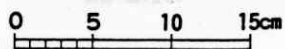
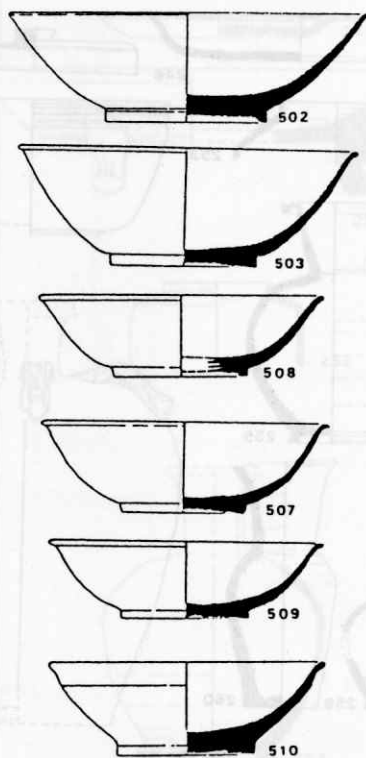
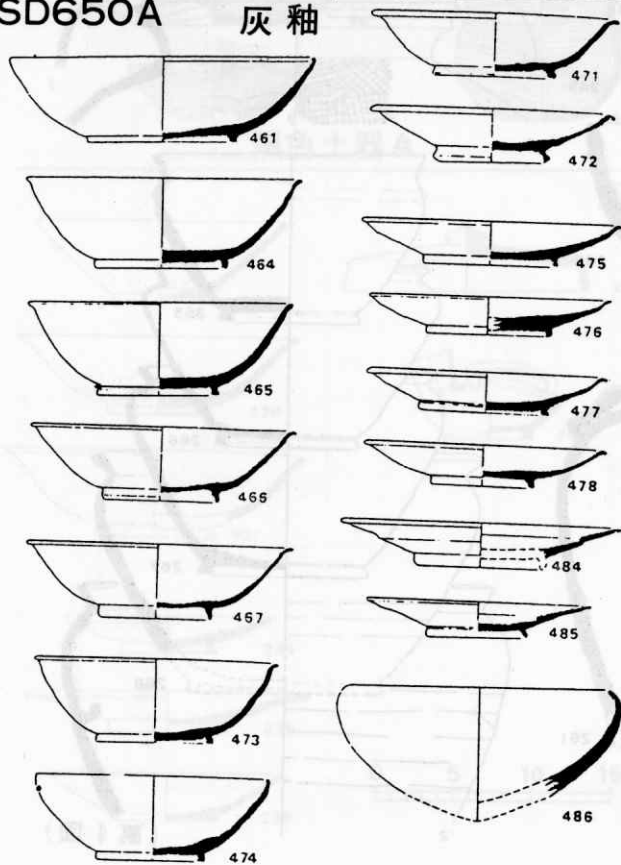


緑釉

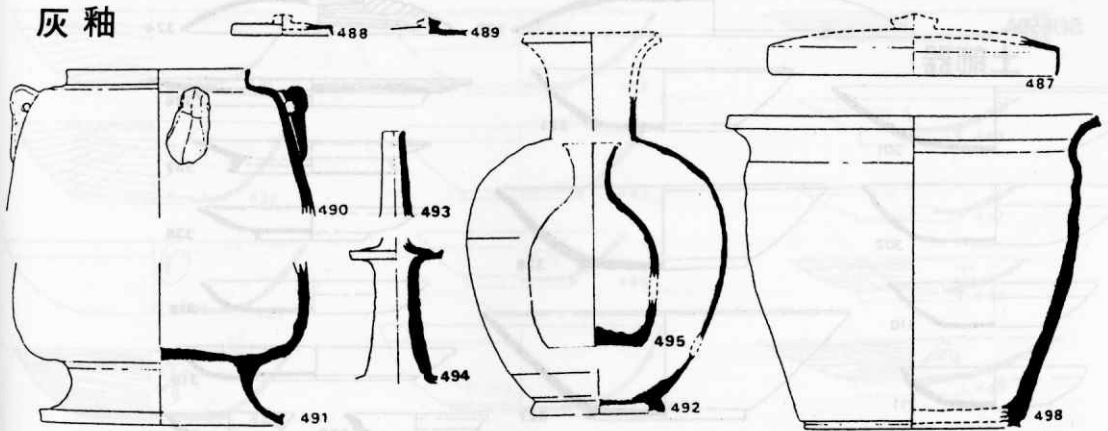


SD650A

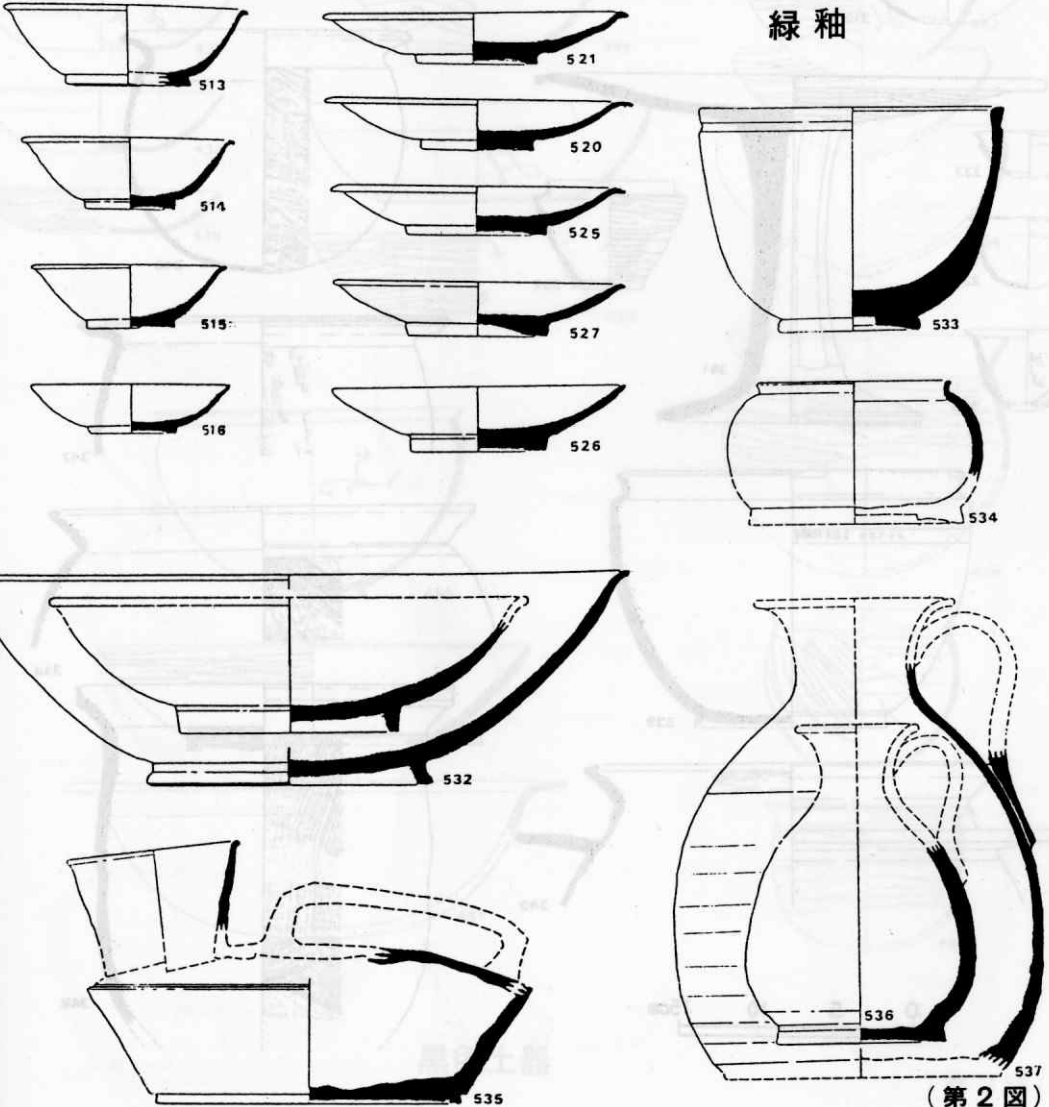
灰釉



灰釉



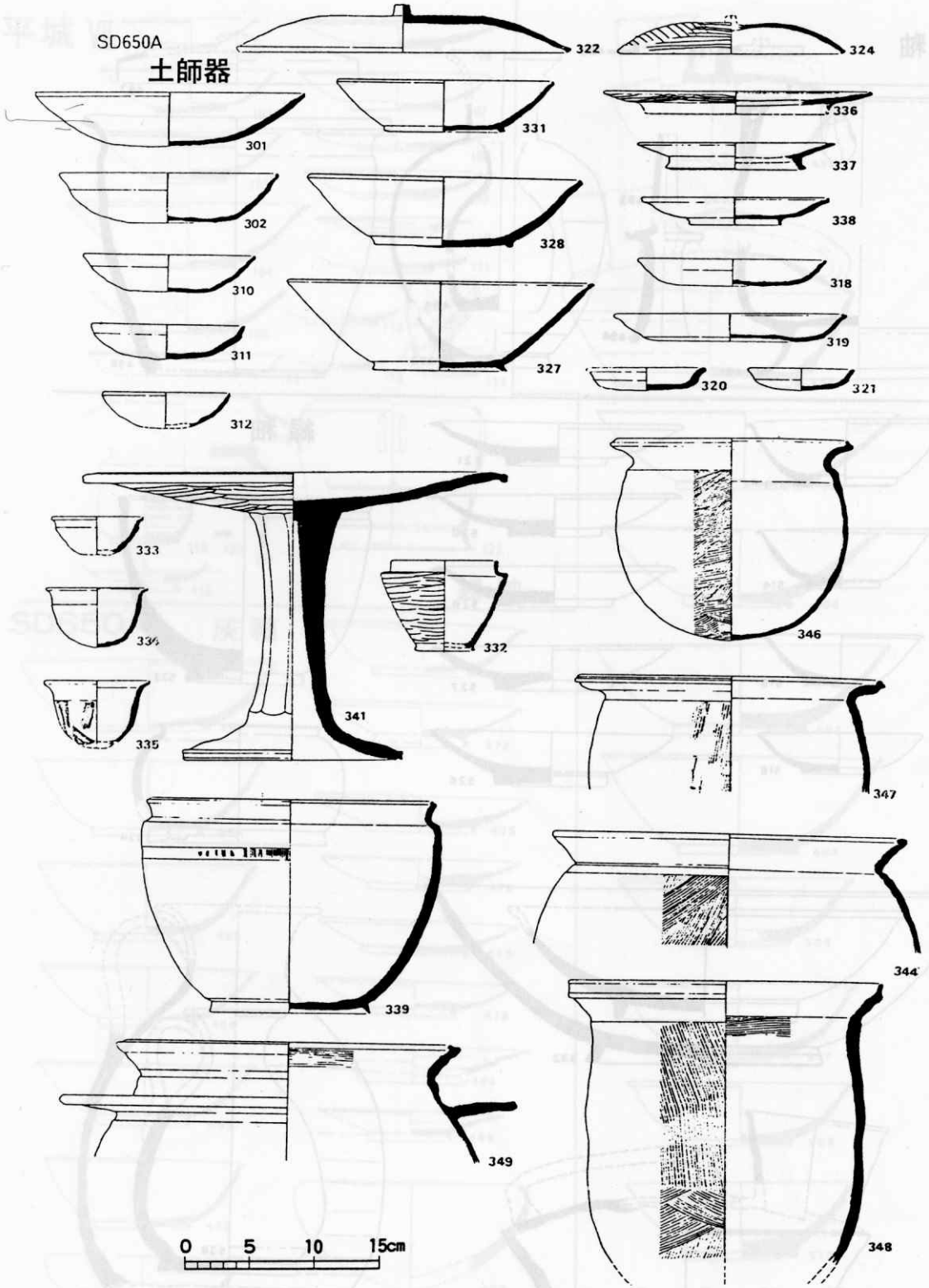
綠釉

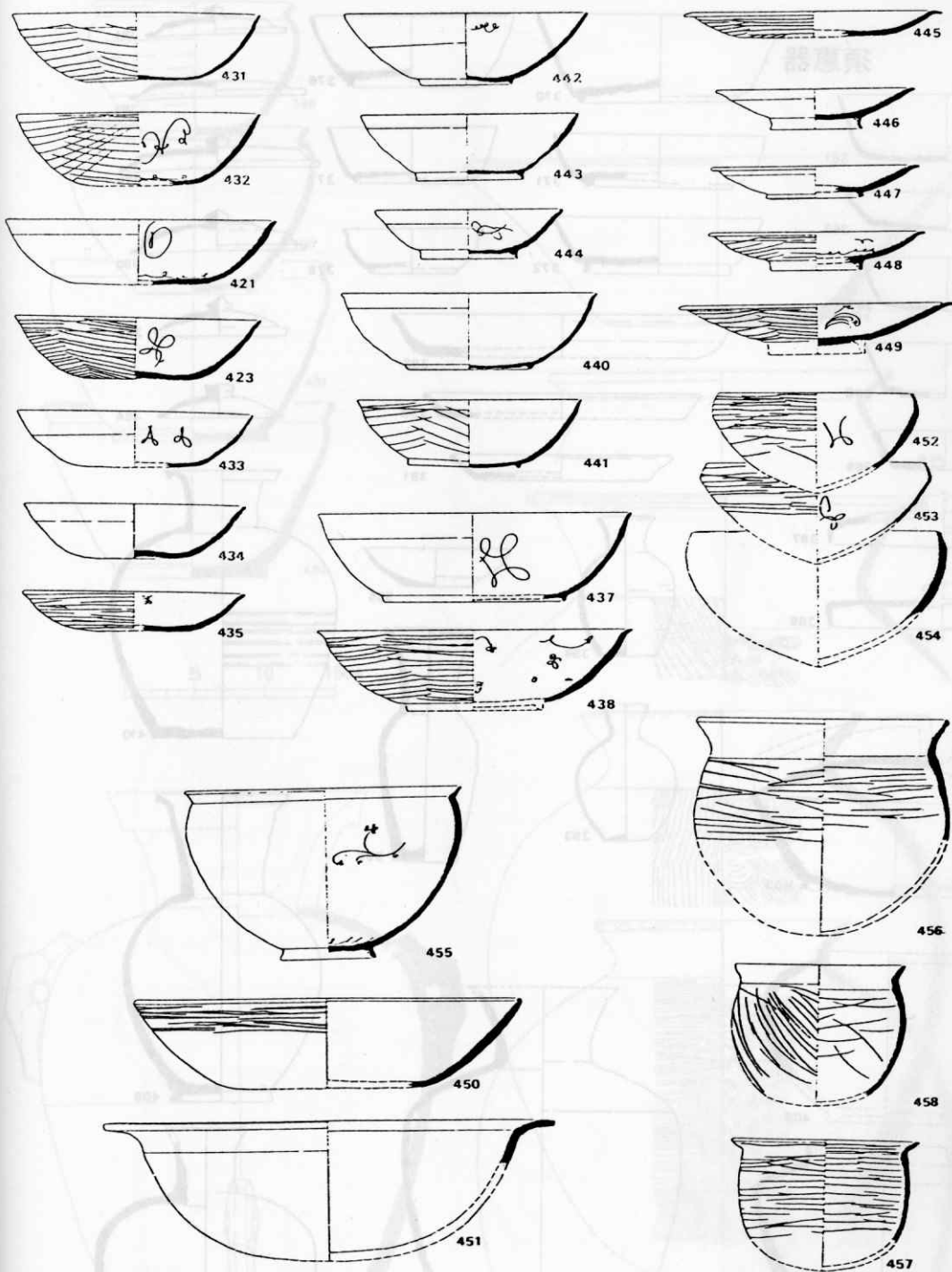


(第2圖)

SD650A

土師器





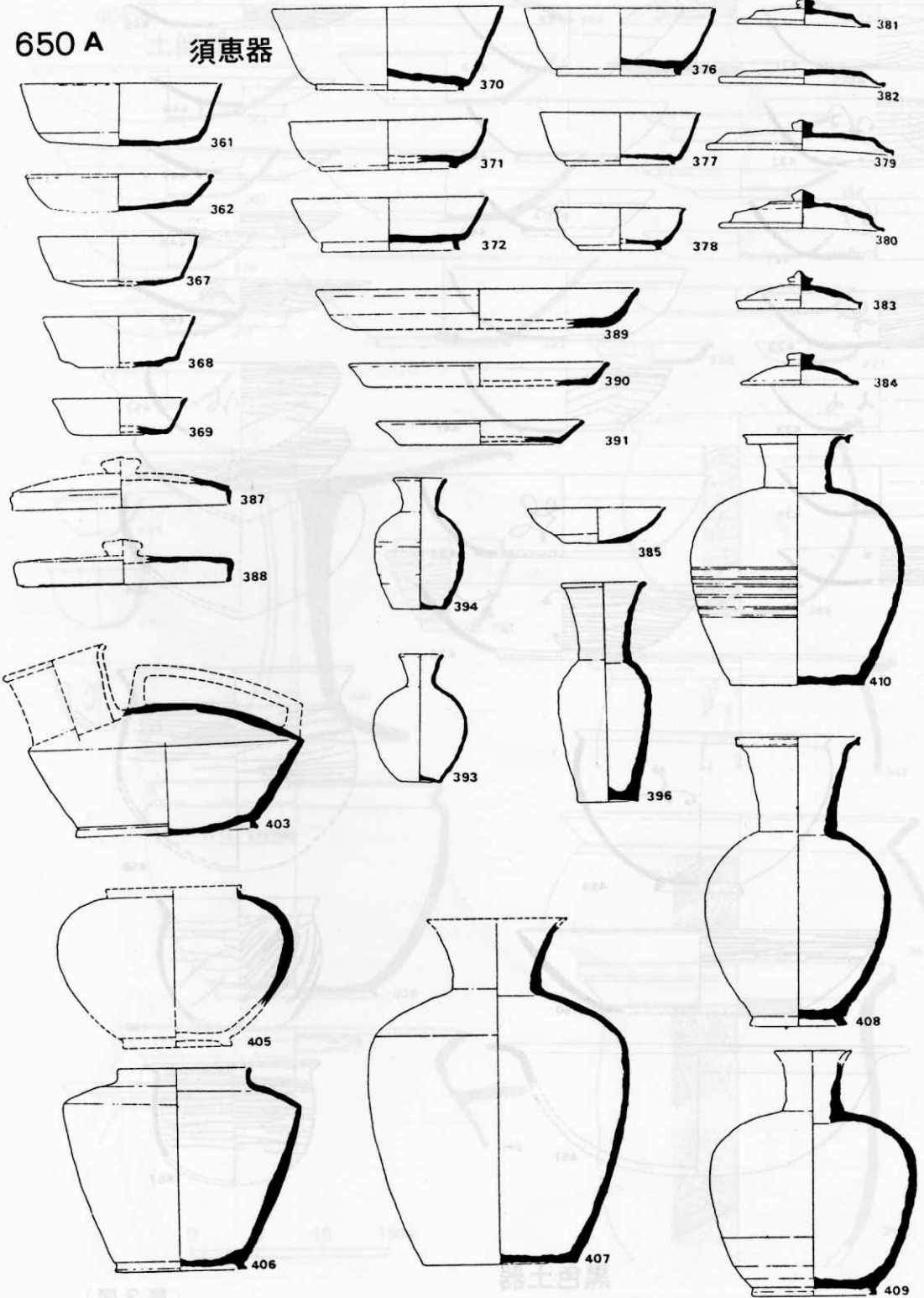
黑色土器

(第3图)

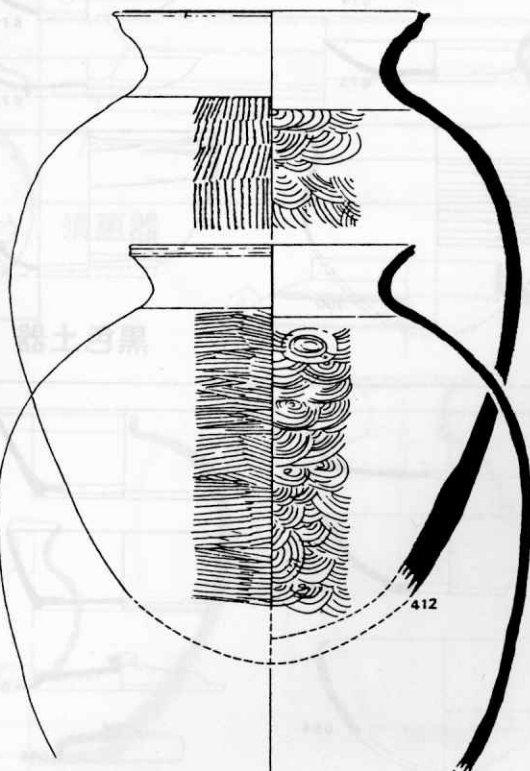
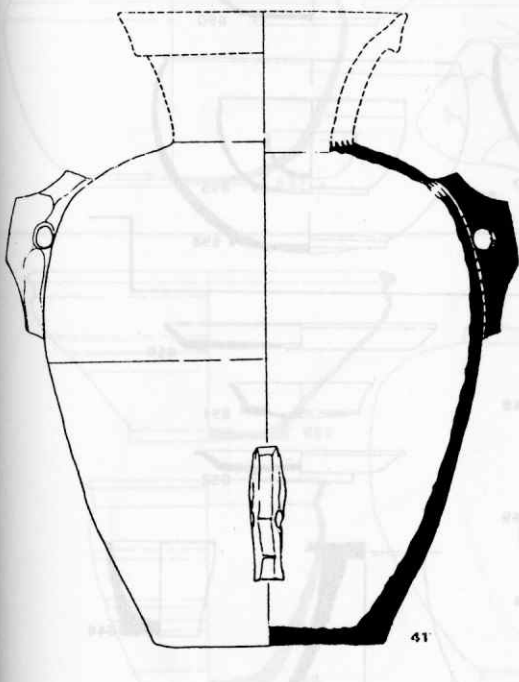
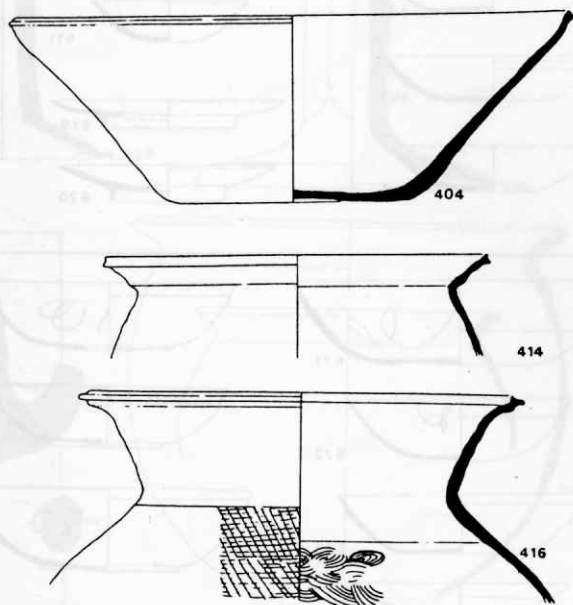
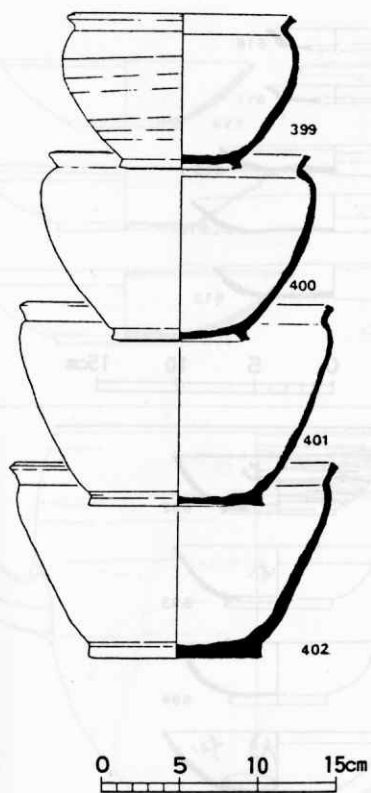


650 A

須惠器



(圖 8 續)

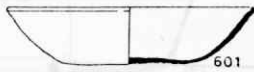


(第4图)

# SD650B

650A

## 土師器



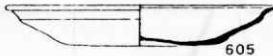
601



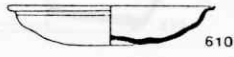
603



604



605



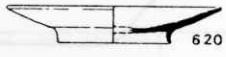
610



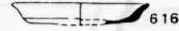
611



619



620



616



617



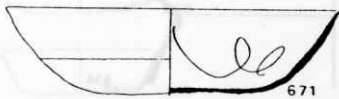
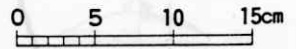
615



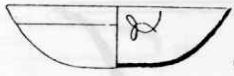
612



613



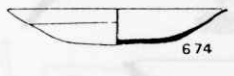
671



672



673



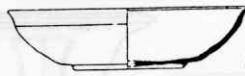
674



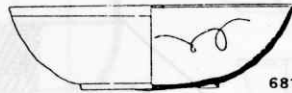
675



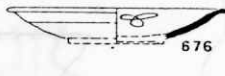
685



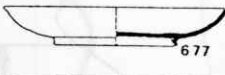
686



681



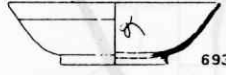
676



677



692



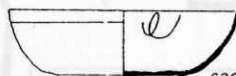
693



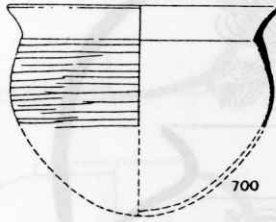
694



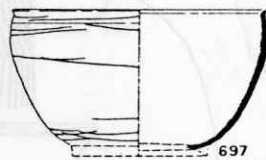
689



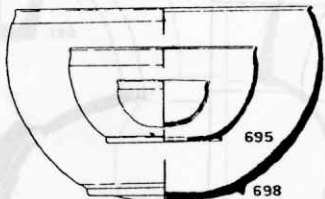
690



700



697



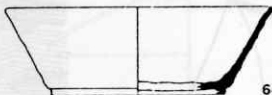
695

698

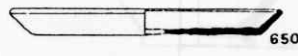
## 黒色土器



641



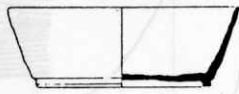
648



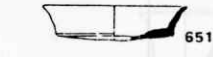
650



642



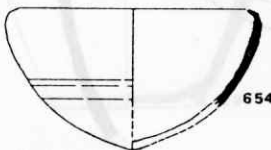
649



651



652



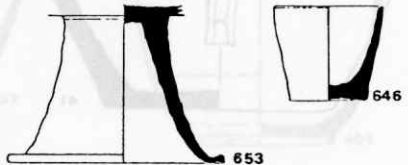
654



644

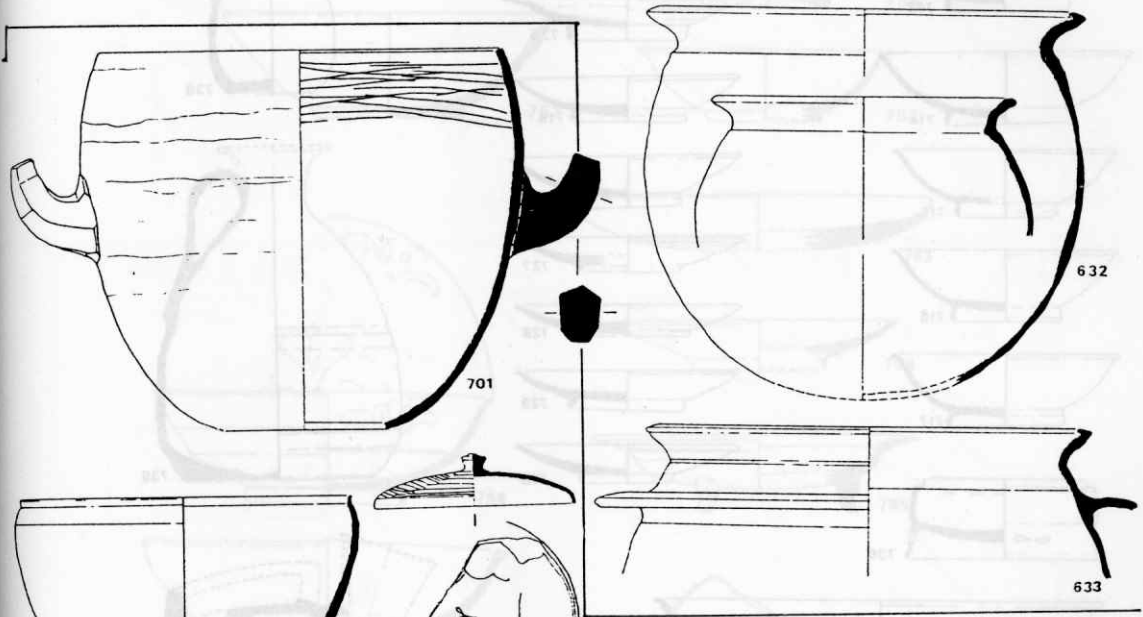
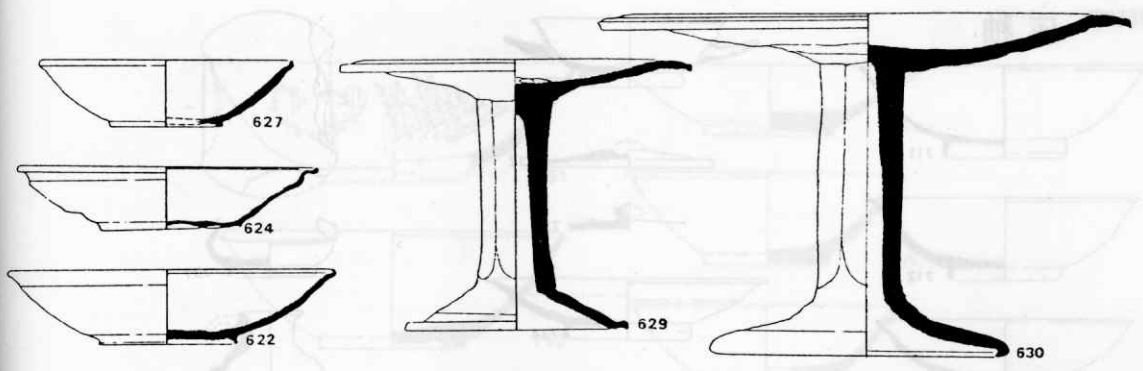


645

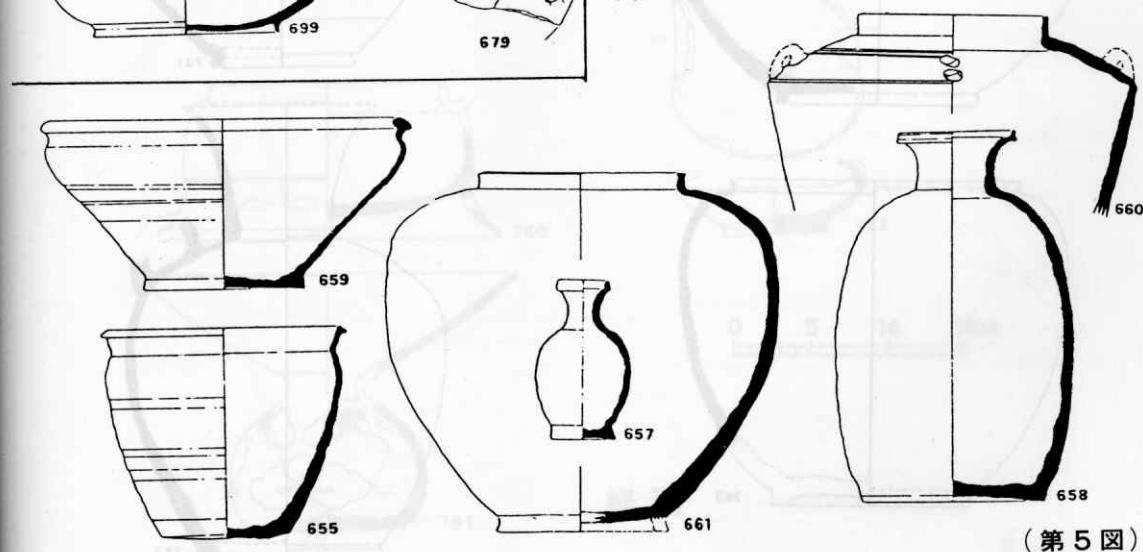


653

646

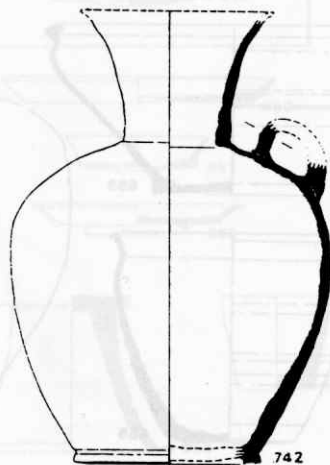
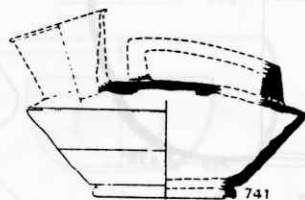
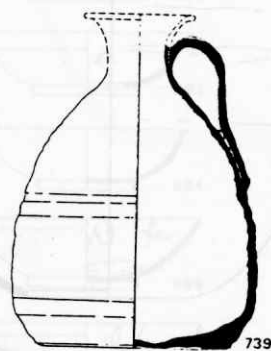
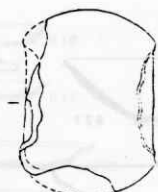
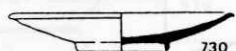
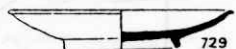
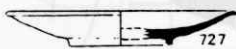
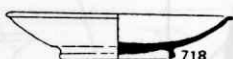
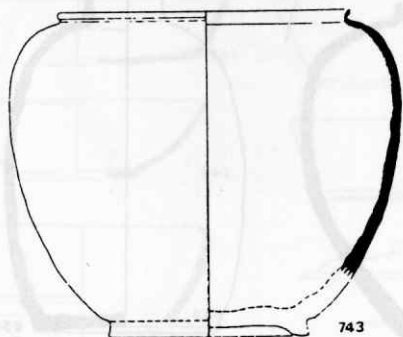
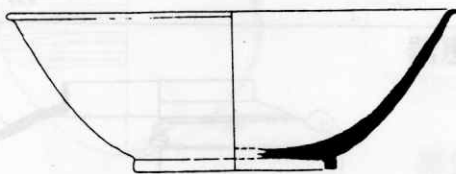
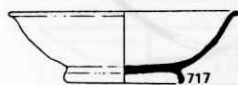
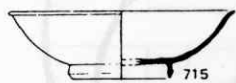
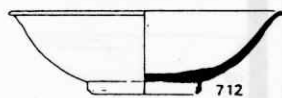
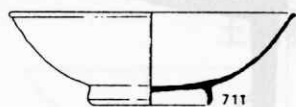


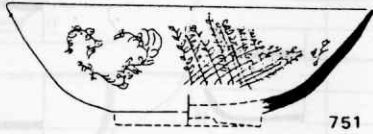
須惠器



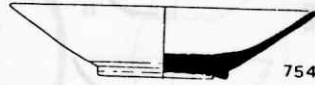
(第5図)

SD650B 灰釉





751



754



752



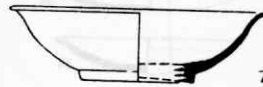
755



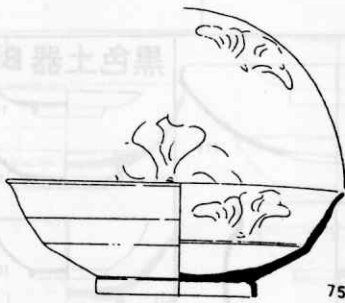
753



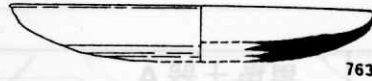
756



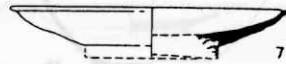
757



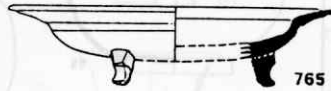
758



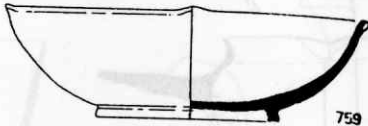
763



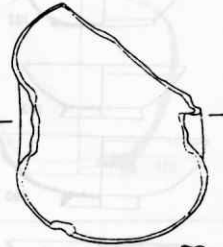
764



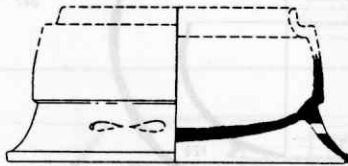
765



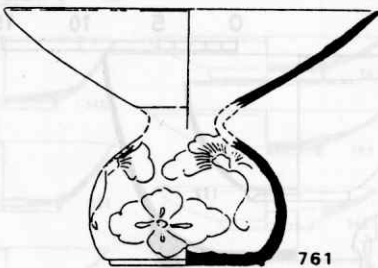
759



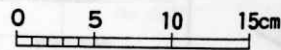
762



760



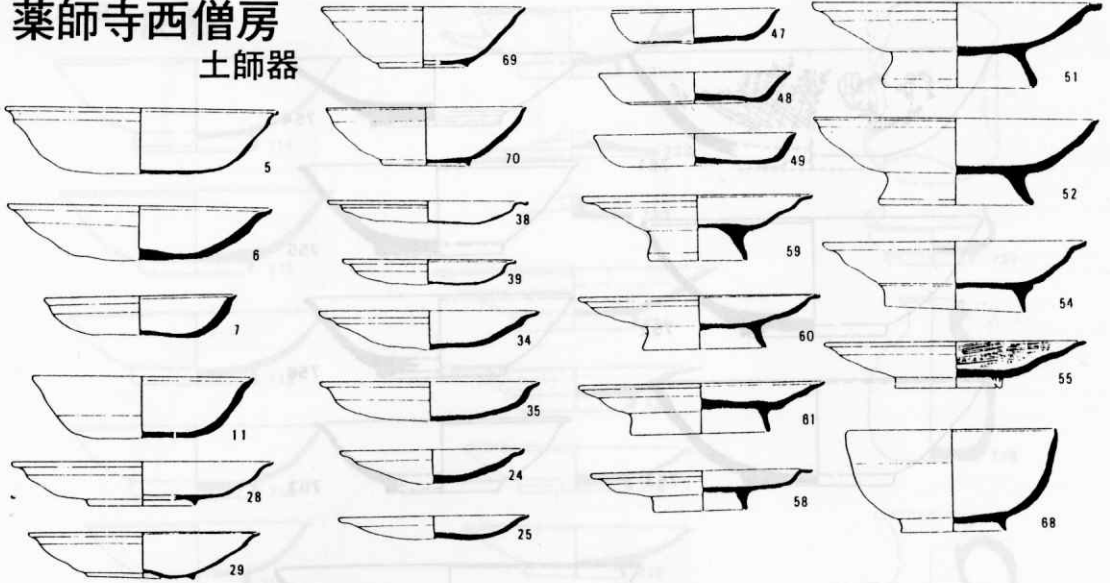
761



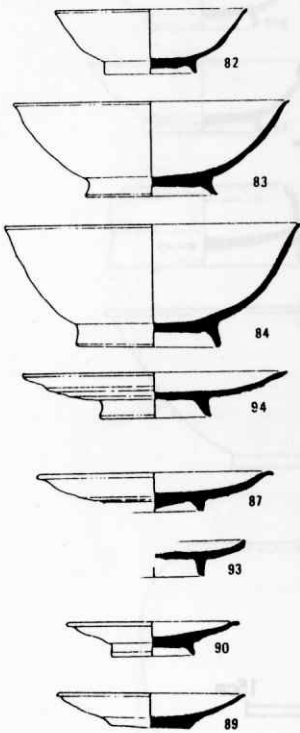
緑釉

(第6図)

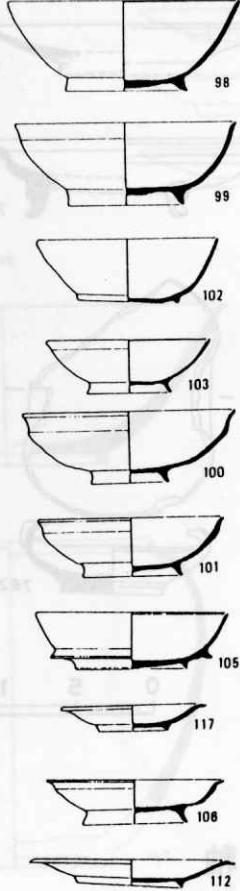
藥師寺西僧房  
土師器



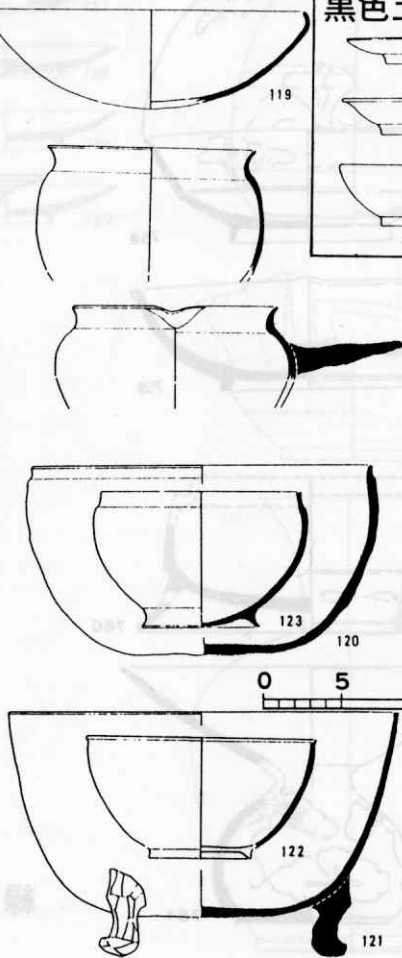
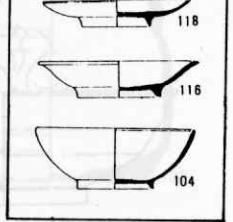
白色土器



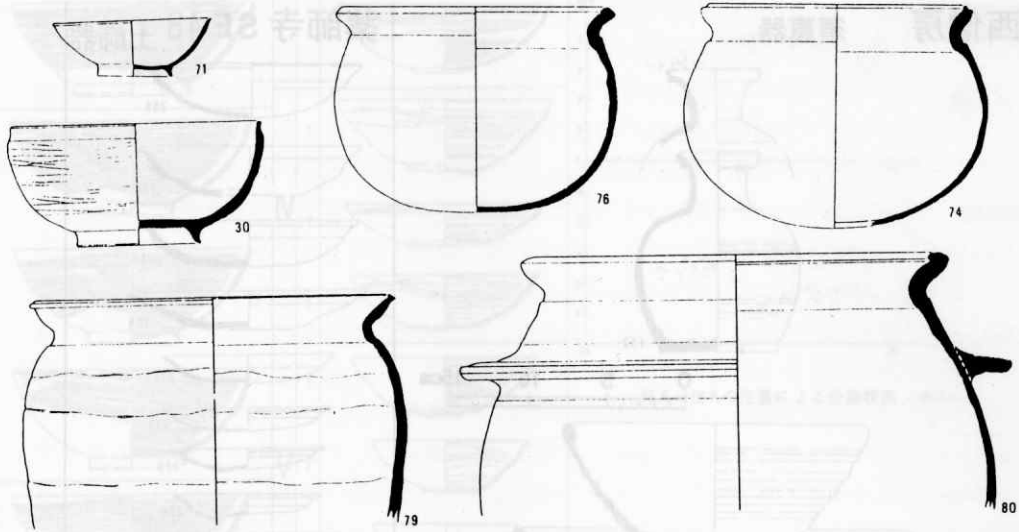
黑色土器A



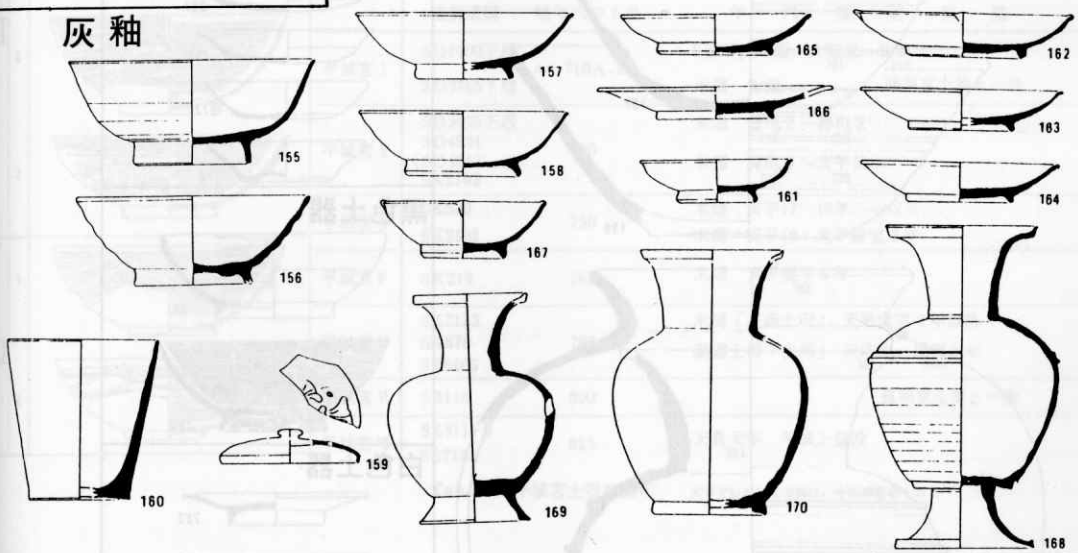
黑色土器B



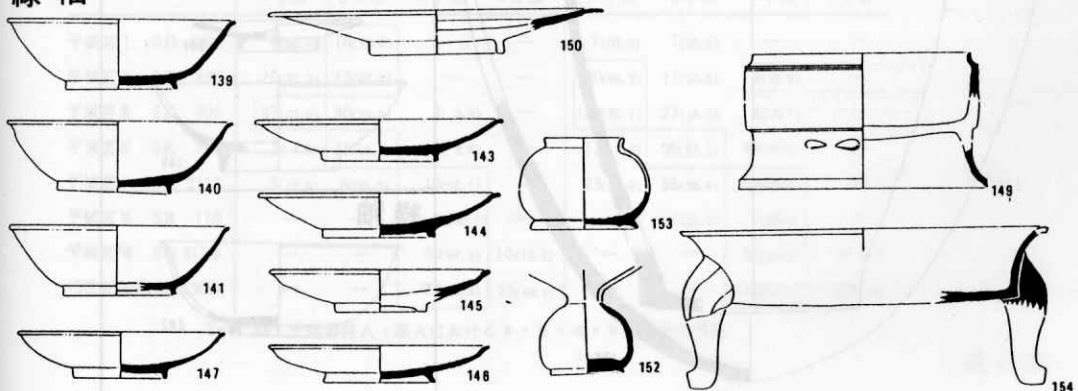
0 5 10 15cm



灰釉



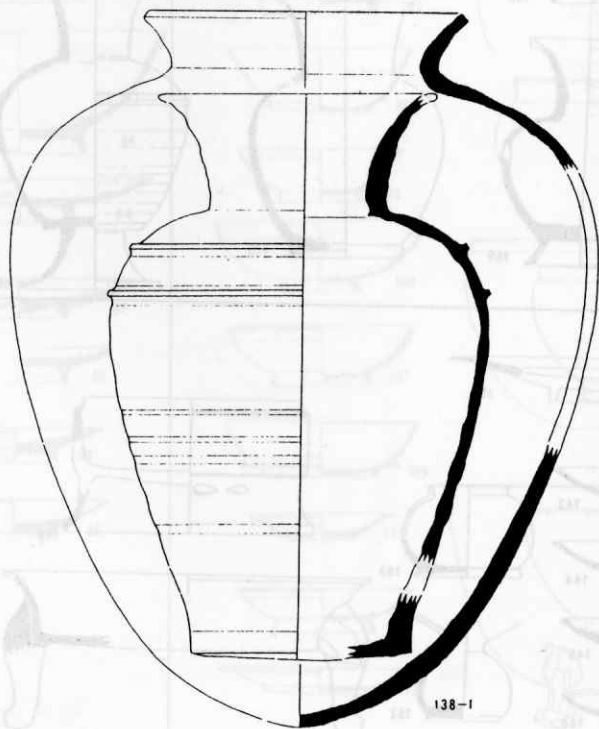
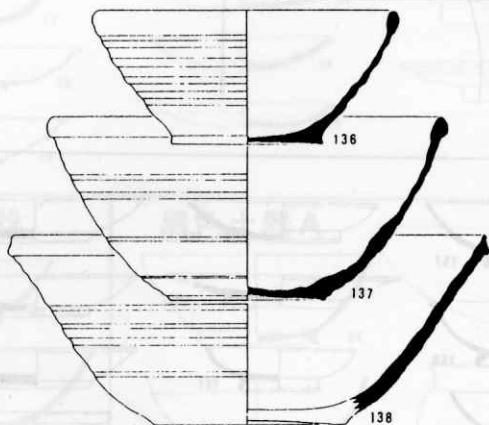
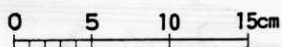
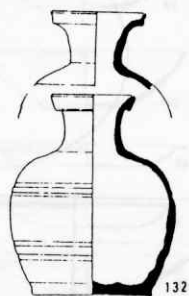
綠釉



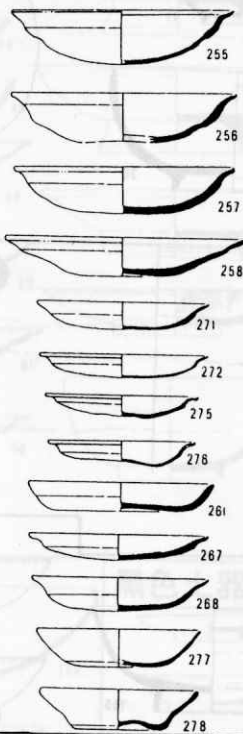


薬師寺西僧房

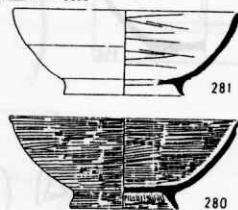
須恵器



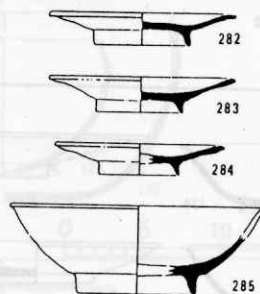
薬師寺 SE 48 土師器



黒色土器

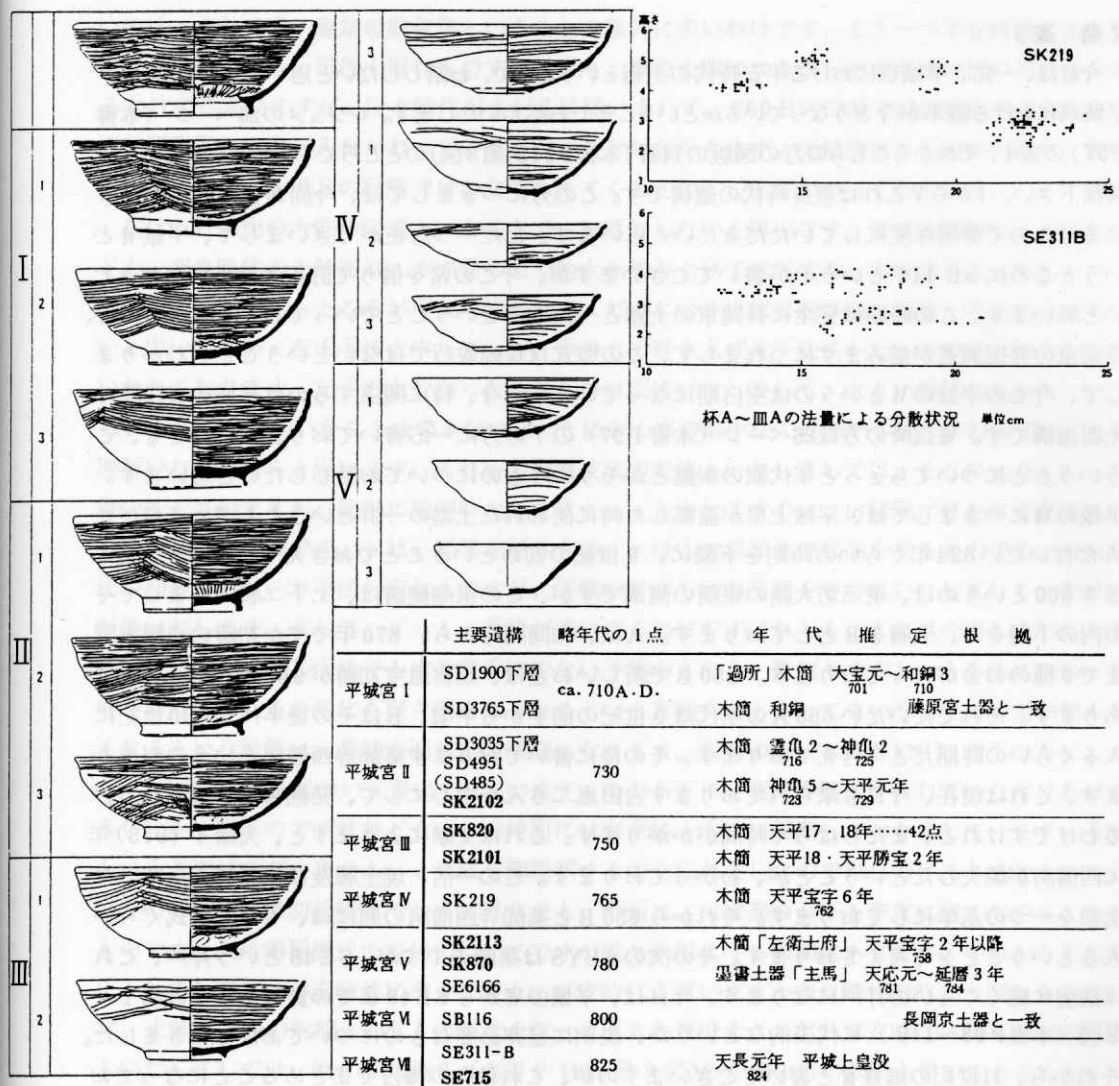


白色土器



緑釉





	主要遺構	略年代の1点	年代推定根拠
平城宮Ⅰ	SD1900下層 SD3765下層	ca. 710A.D.	「過所」木簡 大宝元～和銅3 701 710 木簡 和銅 藤原宮土器と一致
平城宮Ⅱ	SD3035下層 SD4951 (SD485) SK2102	730	木簡 雲鳥2～神亀2 716 725 木簡 神亀5～天平元年 723 729
平城宮Ⅲ	SK820 SK2101	750	木簡 天平17・18年……42点 木簡 天平18・天平勝宝2年
平城宮Ⅳ	SK219	765	木簡 天平宝字6年 762
平城宮Ⅴ	SK2113 SK870 SE6166	780	木簡「左衛土府」 天平宝字2年以降 758 墨書土器「主馬」 天応元～延暦3年 781 784
平城宮Ⅵ	SB116	800	長岡京土器と一致
平城宮Ⅶ	SE311-B SE715	825	天長元年 平城上皇没 824

Tab. 22 平城宮土器の編年 太字でしめした遺構は、今回報告のもの

	杯 A				皿 A			
	a手法	b手法	c手法	e手法	a手法	b手法	c手法	e手法
平城宮Ⅰ SD 1900	6(25.0)	18(75.0)	—	—	7(50.0)	7(50.0)	—	—
平城宮Ⅱ SD 485	10(37.0)	17(63.0)	—	—	30(65.2)	11(23.9)	5(10.9)	—
平城宮Ⅲ SK 820	67(67.0)	30(30.0)	3( 3.0)	—	120(81.1)	27(18.2)	1( 0.7)	—
平城宮Ⅳ SK 219	2( 5.3)	35(52.1)	1( 2.6)	—	11( 7.5)	96(65.3)	40(27.2)	—
平城宮Ⅴ SK 2113	5(17.2)	6(20.7)	18(62.1)	—	25(20.0)	38(30.4)	62(49.6)	—
平城宮Ⅵ SB 116	—	—	3(100.0)	—	—	1(20.0)	4(80.0)	—
平城宮Ⅶ SD 311B	—	—	70(87.5)	10(12.5)	—	—	53(94.6)	3( 5.4)
10世紀初頭 SE 650B	—	—	27(54.0)	23(46.0)	—	—	12(57.0)	8(43.0)

Tab. 23 土師器杯A・皿Aにおけるa・b・c・e各手法の消長

## 《発表》

今日は、一応、平城京における平安時代の土器ということで、お話ししたいと思います。最初に、平城京における編年が今どうなっているかということでお話しいたします。レジュメの26ページ（本書P97）の表1、それからこちらの方の図版の14番（本書P113,第8図）のところですね、そこをちょっと御覧下さい。IからVこれは奈良時代の遺構です。この分につきましては、今回あまり関係がございませんので参照程度にさせていただきたいと思います。ただ一つ訂正がございまして、平城ⅥというところにSB 116 というのが書いてございますが、今この席を借りて訂正させていただきたいと思います。この時期は完全に長岡京の土器と一致するというのでいってございましたけれど、長岡京の発掘調査が進みますにつれて、この型式は長岡並行ではないということがわかりまして、今この平城のⅥというのは空白期になっています。今、特に関係するのは平城のⅦ以降の土器遺構です。Ⅶ以降の方は26ページ（本書P97）の下の方に一応書いておりますけれども、こういうことについてちょっと年代観の根拠とかそういうものについてお話ししたいと思います。平城のⅦにつきましては、平城上皇が遷都した時に使われた土器の一群ということで、天皇が死んだだいたい824年ぐらいの時期を下限に、9世紀の初めということでおさえております。続きます650というのは、東三坊大路の東側の側溝ですが、この東側側溝は、上下二層ありましてその内の下層をA、上層をBとしております。Aは、和同開珎から、870年ですか初鑄の貞観永宝まで9種のお金が入っております。650 Bで新しいお金は、延喜通宝初鑄が907年ということであります。それでだいたい650 Aの年代は9世紀の前半から中頃、Bはその後半代から10世紀に入るぐらいの時期だと今考えております。その後書いております薬師寺西僧房というのがあります。これは現在、今日も来られております吉田恵二さんを中心にして、発掘報告がなされているわけですが、まだしばらく時間がかかります。これは文献によりますと、天禄4（973）年に西僧房が焼失したということが、わかっております。この一括、焼土層及び床面に入っていた土器を一つの基準としております。それから650 Bと薬師寺西僧房の間には、もう一型式ぐらい入るということを今考えております。その次の6BYSは薬師寺ですが、SE48という井戸、これは僧房に続くぐらいの井戸になります。今日は、平城のⅦからSE48までの資料を、この第1～8図（本書P98～113）に代表的なというか、説明に是非必要なものについてあげておきました。それから、11世紀の馬寮Ⅲと書いてございますのが、これは次の報告でまとめることになっておりますが、SE48に続く時期ということで、話しの関係上、後でこのことについてお話しします。次に平安時代の焼物には、どんな種類のものがあるかと申しますと、まず、土師器それから黒色土器A・B、須恵器、灰釉陶器、白色土器、この白色土器につきましては、後でまた話題になると思いますが、白色土器、中国製輸入磁器がございまして。それから時代が下って、11世紀の中頃と思われる時期に、瓦器及び須恵器の系統をくむ須恵器系土器が出てくると考えております。一応、奈良時代と平安時代の土器構成がどのように違うかということで、26ページ（本書P97）の第2表に示しておきました。平城Ⅲというのが、だいたい天平年間とさせていただければと思います。奈良時代の焼物には、若干、三彩、二彩、緑釉というようなものがございましてけれども、それは微々たるものでして、平城宮の主な焼物は土師器と須恵器になっております。それから（）内に書いてございますのが、供膳形態の比率です。650 Aの段階になりますと、土師器、須恵器、黒色土器、それから灰釉陶器、緑釉陶器があります。須恵器は、総数的にみれば多いのですが、供膳形態は4.6%となります。次のBの段階では3.7%と供膳形態が非常に少なくなっていく、多

いのは、これは壺、甕類の貯蔵器ということで量的に多いわけです。もう一つ平安時代で大きな特色と申しますか、黒色土器なんですけれども、黒色土器につきましても奈良時代の初めからあるわけですが、段々時代がさがるに従いまして、650 Bの段階では供膳形態が25%を占め、須恵器と位置が入れかわっているということがわかります。灰釉陶器とか緑釉陶器は、非常に少数ですが、650 Bの段階ではかなりふえてくるということがわかっております。

次は、各焼物の大筋の変遷ということで、お話ししたいと思います。まず土師器なんですけれども、奈良時代の土師器は、木の葉の上で粘土を巻き上げて成形する、木の葉手法と呼んでいるものが一般的です。ところが平安時代の初め、だいたい9世紀の前半頃、初頭と考えてもよろしいと思いますが、左手手法と申しまして、手の上で巻き上げる手法にかわってゆくというふうにいわれております。左手の上で作ったかどうかは別にいたしまして、大きい器種なんかについては、ちょっとそういうことはできないし、とにかく木の葉手法では無い手法にかわってゆくという御理解いただけたらと思います。それから調整技法の変化といたしましては、ここにa、b、c、eと書いてございますが、簡単に説明いたしますと、aと申しますのは、口縁部だけをなで底部外面を調整しないものです。bは、底部を削るもの、cは、口縁部及び底部を削るものです。奈良時代の初めは、a、b手法が主なんです。平城のⅣぐらいの時期を中心にいたしましてc手法に転換いたします。そして、ずっとc手法が盛行するわけですが、これは今申しましたように、成形手法が同じ手法でも木の葉手法でない手法のものを、篋削りするという手法にかわってゆくわけです。この変化も段々削らなくなるという方向でまとまっております。完全に削らなくなるという段階は、薬師寺西僧房の時期になります。図版の14（本書P113）の下の方に、a、b、c手法の変遷について書いてございます。このあとに、薬師寺僧房を入れていただければよろしいかと思うのですけれども、この時期には完全にe手法に転換してございまして、まずc手法というものはございません。e手法を御説明するのを忘れまして申し分けありません。eというのは、内面は勿論横なでしますけれども、外面は、口縁部の直下を非常に強くなでするというものです。次に器種構成の変化についてですが段々小形化する傾向にあります。それから主な変化としましては、平安時代になりますと、平安時代と言いますか奈良時代の終わり頃からはだいに、土師器の壺の形態というものがなくなってくるわけです。ただ、平安時代に残る一つの器種といたしましては、例えば図版9（本書P102、第3図）の左側の方の346と書いてあるようなものが、かなり後まで残っております。これ以外にあまり壺形態というものはありません。それから大きな問題なのですが、平安時代の初めから10世紀代までの段階の土師器の器種には、一つは前代の系譜を引く奈良時代的な延長であるものと、それから緑釉、灰釉なんかの碗、皿類の形態をまねたものがあり、後者はすでに平安時代の初め頃から出現しています。例えば、図版9（第3図）左側の650 Aの336とかですね、それからちょっと時代がさがって650 Bの図版11（本書P107、第5図）の627といった碗皿形態が出てくるわけです。9世紀から10世紀代の土師器の器種構成には、この二つの様相があると思います。それから、奈良時代のものと平安時代のものと法量の規格性をみますと、平安時代になると非常にバラバラになるということも一つの例としてあげておきます。図版14（P113、第8図）の上の方ドットした図、杯、皿の法量による分散状況、ここでSK 219と書いてあるのが天平宝字あるいは勝宝年間、勝宝から天平宝字とする平城宮のⅣという時期のものでございますけれども、ここでは一応きれいに分かれるわけです。次の平城のⅦのSE 311 Bの段階になりますと、かなり法量がバラバラでまとまりが無くなってくるというよ

うな状況が御覧になっていただけるかと思えます。

続きまして須恵器なんですけれども、平安時代における須恵器で一番大きな変化は、ロクロ水挽き成形の登場ということであると思えます。ロクロ水挽き成形におきましては、平城のⅤ段階ですすでに出ております。平城のⅤ段階のロクロ水挽きの器種は、平城Ⅶのところではいいますと図版7（P99、第1図）の260の系統のものですね。これは、奈良時代の平城のⅤぐらい奈良末からあるわけなんですけれども、まずこのものにあらわれています。ただ一つ注意しなくてはならないのは、糸切り痕あるからといって、これがすべて粘土塊から一気に引き上げたものでないということに御注意下さい。ただ粘土塊から一気に挽き上げたものといましては、図版7（本書P99）の259のちっちゃなものですね、それから260、こういったものに一気に挽き上げた痕跡があります。先程も申しましたように須恵器の供膳形態が段々と少なくなってきております。それから、先程お話にもございましたけれども、650B段階で少し注目すべきものが出ております。須恵器の図版11（本書P106～107、第5図）の左側です、642番という碗形態が出てまいります。これにつきましては、先程中村さんから年代観が与えられておりましたけれども、これはもしかすると10世紀の前半ぐらいまではいかもわからんということ、この手の碗は、播磨あたりから丹波、それから但馬にもございます。また、越前にもこの手の碗がありまして、どこ産のものかについては、みなさんに検討していただきたいわけです。けれども一応いわゆる糸切り碗が出現するかというのは、650Bの段階で少いながら出てまいります。それから奈良時代の場合は、陶邑産が主だったのですが、陶邑の衰退にともないまして、主に650A、Bの須恵器と申しますのは、亀岡の篠古窯です。それから播磨のものが入ってきます。それから昨日吉岡さんからお話がございましたけれど、北陸の方から入っているようで、かなりいろいろなところから入っているようです。

それから黒色土器Aにつきまして、次に移りますけれども、表では平城Ⅲにその出現期を置いておりますが、これを平城のⅠに改めていただきたいと思えます。これは薬師寺で平城のⅠに匹敵する一括中にすでにありますので奈良の初めからあるということです。奈良時代の黒色土器Aにつきましては、同時期の土師器と同じ器形に黒色処理しているわけでございます。そして、奈良時代には非常に少ない。平城のⅦの段階で始めて供膳、貯蔵、煮沸器のセットが登場します。黒色土器というのは勿論、土師器の系統を引くものです。奈良時代には、土師器の工人が、黒色土器を焼いていたのですが、平安時代の初めに土師器を焼く集団と、黒色土器Aを焼く集団に分かれていったのではないかと考えられるわけです。調整手法の上では、土師器はe手法への傾向をたどり技法の簡略化をはかるのに対しまして、一貫して奈良時代からの伝統を持ったc手法をとり、複雑な製作技法を保持しております。暗文も勿論ありますけれども、その暗文は消失の方向をたどるといえるかと思えます。次に器種の変化につきましては、図版9（P103、第3図）の650Aの黒色土器を見ていただきたいと思えます。この杯類なんです、431～435ぐらいの間の杯ですとか、その隣の特に437とか438こういったでかい杯Bといっていますけれども、そういうものは一応奈良時代からの系統のものでもう一つはその上の方にあります高台付の碗です、こういうものとその右側にあります高台付の皿というものがあるわけです。最初の頃は、奈良時代の様相を残しながらも、段々これも碗、皿特にその縁釉形態をまねた形で展開していくと思うのです。

次に黒色土器Bについてお話いたしますが、出現時期につきましては、平城のⅦにございます。

SD311Bの井戸の一括の中に出てまいります。平城の場合は、量的に少なくて日常什器は、この黒色土器Bだけでは完結できないという状況です。黒色土器Bの器種には、硯とか仏花器、香炉、ミニチュアの製品を生産しております、かなり特殊な生産だということがわかっております。なお、黒色Bが増加するのは、だいたい西僧房以降の時期だと考えております。

次に鉛釉陶器です。平安時代にはありますと、緑釉単彩のものが出てくるわけです。これは正確に申しますと、奈良三彩から緑釉単彩の方向をとる平城Ⅶの段階では、低火度焼成の緑釉を仮に軟陶と申しますけれども、そういうものが多くて緑釉硬陶のものが非常に少ない。緑釉硬陶のものは、このいわゆる奈良三彩的なものからの系列でくるのではなくて、ちょっと遅れて軟陶が始まった段階で出てくるのではないかと思うわけです。これが段々無彩化の方向をたどって、消滅するというふうに思っております。奈良時代末ないし平安時代始めには、まだ正倉院なんかにありますような、ああいう形態のものを若干作っているわけですが、その後完全に高台の碗とか、皿にかわってゆくという一つの方向があります。

次は、問題の灰釉陶器ですが、出現時期は一応瓶類、仏花器につきましては平城のⅣ～Ⅴということで奈良時代にすでに、原始灰釉と呼ばれている時期のものと思いますが、この頃に登場いたします。碗・皿の登場は、平城のⅦいわゆる平城上皇の時期にすでに出ております。平城宮で出ます灰釉の中で、650というのが非常に大きな意味をもつわけですが、その中で650のAとBとの大きな違いといいますと、重ね焼の出現とか釉掛けとかの問題があるわけですが、650Aにつきましては重ね焼ではなくてトチンを使って焼いている。あの見込みに高台重ね痕がつかないというような黒笹の14号ぐらいに比定していいんではないかと思われるものです。それから650Bというのは、黒笹90号の方に比定して良からうかと思えます。それから西僧房の灰釉ですが、西僧房につきましては、僧房の性格もありましてかなり伝世品も多くもっております。例えば、ここに図示しておりませんが、三彩の多嘴壺ですとかですね、三彩の鉄鉢とかいろいろなものがあるわけですが、これをはぶいた形でここにのっけております(P110～112,第7,8図)。この時期にですね、これは山茶碗かもわからんということなんですけれども、例えば、第7図156の体部外面不調整のものが出てまいります。勿論底部は糸切りのままというものがあります。その上の155なんかの場合も昨日新たに設定——何窯式でしたかね。NN82みたいな形の非常に高台の足の高い形のものが出ております。それから、168番の方なんかは一応東濃系でしたかね。O-53ですか、このぐらいの窯から出ている手もあるのです。この時期はいままで一応O-53というふうに今までは考えていたわけですが、昨日の話だともうちょっとさげて考えなければいけないかなあと思っております。灰釉陶器につきましては、ちょっとおいておきます。

次に白色土器というのがございます。これは、ロクロ成形還元焼成なのです。これは、例えば図版13(本書P110,第7図)の左下にありますが、こういうのがございます。この器種は碗、皿に限られております。底部には糸切りを残しております、これは非常に緻密な胎土をもって、割り合い軟質的なあがりになっております。一応これは、低火度焼成で緑釉軟陶系の緑釉を焼いていた人達の末裔の所産であり、釉を掛けなくなった段階のものだと思います。そうすると平安京に移ってから、平城京にそういう窯があったかということも指摘されるかと思いますがこの時期には、文献上でも東大寺とかそういうところでもかなり、官工房の人間をかなり駆使しているわけですので、薬師寺でもあってもおかしくないということも考えられるわけです。この

白色土器につきましては、薬師寺西僧房と次のSE48という時期に限られております。その官工房とかその辺の衰退状況とかそういうものを反映するものではないかと考えております。

次に、瓦器ですけれども、瓦器につきましては、稲垣晋也さんとか白石太一郎さんとかそれから最近では橋本久和さんなんかの、綿密な編年研究、地域に基づいた形でやられておまして、そういう研究の成果もごございますけれども、私共の研究所では、奈良の橿原の研究所と合同いたしまして、今、法隆寺の調査を行っております。法隆寺の調査と次に先程申しました馬寮の整理ということがございまして、一応試算といたしまして、後に平城京とそれから法隆寺の瓦器の分類を作ったわけです(P118)。この分類につきましては、だいたい大筋は年代的にならんでいるかと思うんですけれども、特にⅠの2、3とⅡの1~3は、若干並行関係であるということは、一応遺構の上から考えられるわけです。次に瓦器の出現年代ですけれども、これは先程からいろいろ問題になっております平安京左京四条一坊の井戸SE-8、ここに何回も登場しましたけれども、その年代から11世紀中頃ぐらいにすでにあったのであろう。一応この橋本さんなんかの編年でも一番古い手ではなくて、瓦器は、さらに1~2型式さかのぼりうるもんだということで、11世紀の中頃あるいは初めまでに、いっちゃんかもわからんというふうにいわれているものです。それから次に瓦器の技法調整の変化につきまして、大量生産をめざした内型成形ということで書いてございます。これは以前からだれか言われていることなんです、今度私共の研究所の、藤原調査部の井上さんと川越さんが実験考古学的にやったものを、次の考古学雑誌で発表されるわけです。私も賛同いたしておりますので、一応内型成形と書いています。しかし、すべての瓦器が、内型というのではなくて、大和の部分については、そうでないかと考えております。それから水鏡粘土を使用していることが黒色土器と大きく違う点です。それからその調整法の変化ですが、磨きの簡略化方向が進み、底部内面の磨きは、暗文風にかわっていくような変化がとらえられると思います。器種、形態の変化につきましては、大椀、小椀、小皿とか高台付の皿がございまして、小形化の傾向で高台が非常に矮小化してくるというような方向をたどります。まだ、新しいところについてはよくわかりません。今回は特に、平安時代ということで後のことについてはちょっと省略いたします。

次は山茶碗ですが、出現時期もやはり先程のSE08の掘り方から出てくる山茶碗があるということです。すでに11世紀前半には出現していたのではないかというふうに考えております。

それでは、須恵器系土器なんですけれども、薬師寺西僧房の方をちょっとみていただきたいのですけれども、図版14(本書P112,第8図)の左側の鉢とそれから壺類がございまして。この鉢なんかは須恵器系というか、非常に焼きの甘い須恵器なんで、このぐらいの時期にはもう出現しているのではないかと。須恵器系器種につきましては糸切りの椀、それから鉢、壺などがあるわけですが、

一応今までお話したようなことは、表1の平城京のやきものの消長というようなことで、こういうふうな表を作ってみました。

馬寮Ⅲにつきましては、図面はありませんが図版14(P112,第8図)SE48の一群ですね、この手の黒色土器の280と281とがありますけれども、この手の形態よりもっと内弯気味に立ち上がるものです。それから高台は非常にちっちゃくくる時期のものです。上の方の皿ですね、あの275みたいなものが、もっとちっちゃくって押し付けられたようなものになるわけです。こういう時期のものが、一応馬寮Ⅲと設定しているものです。それから、馬寮Ⅳといたし

ましたのは、ここで瓦器の編年表のⅠ、Ⅱ ぐらいの時期のものが一応馬寮のⅣということですが。今のところ9世紀～12世紀までの編年が、大和でもだいたいやれるのではないかと考えております。けれども、後の分につきましては、まだまだ整理が進んでおりませんので、公にできるのはだいぶ先のことかと思えます。まとまりがございませんが、平城京における11世紀ぐらいまでの状況は一応お話したかと思えます。

それで若干、平安京との対比ということで残りの時間お話したいと思えます。

先程寺島さんからお話がありましたけれど……。薬師寺西僧房の時期、あるいはSE48のものに並行関係にあると思われるものを上げておきます。京都埋文の報告で——最近出たばかりの報告で烏丸線立会調査17地点の井戸、SE01ですかね、この時期が恐らく西僧房ぐらいではないかと思われます。これは乾元大宝だったですか、958年ぐらいの初鑄ということできさきお話があったと思えます。長岡京の方ではSD25というものも西僧房ぐらいに比定できると思われます。若干SE48に傾斜気味のものもありますけれども、だいたい同じ時期だということですが。それから先程お話のありました内膳町のSK18、寺島さんの方にありましたけれどそういうものがあります。以上でお話を終わります。 (発表以上)

#### — 質 疑 —

(質問—伊藤久嗣) 三重の伊藤でございます。先程ですね、26ページ(本書P97)の平城京のやきものの消長です、9世紀代東三坊大路の650Bと薬師寺西僧房の間にもう一型式入るとのお話でしたが、できましたらその辺の中味を資料の図版11(第5図)と12(第6図)の650Bと西僧房を対比していただいて、どの辺が違うのかちょっと御説明願えませんか。

(巽) 例えばですね、内膳町のSK19(寺島第1図)ぐらいの時期といえますかね、そのぐらいの時期のものをそこへ入れた方がいいんじゃないかと思うんですけれども——よろしいでしょうか。内膳町のSK19かあるいはもう少し遡る時期のものがあるんじゃないかと思えます。